

## 関係団体の意見と対応

【平成 1 9 年度連携排砂の実施結果について】

関係団体名	関係団体の意見	対応状況
海面漁業関係団体	<p>① 連携排砂でダムから流出した土砂量や海に流入した土砂量及び拡散状況の把握に今後も努めて欲しい。また、水深の深い地点の調査（底質も含む）についても継続して実施して欲しい。</p>	<p>① 土砂収支について一定の精度を持ったシミュレーションを行うにあたっては、シミュレーションの入力条件及びシミュレーション結果と排砂中及び洪水中の土砂モニタリングによる実測値との検証が重要であるが、現在の技術では洪水時の観測が困難な状況にある。</p> <p>このように土砂動態の測定技術の飛躍的な向上は難しいものではあるが、土砂動態の把握のため、平成 16 年以降、新たに排砂期間前の 5 月にダム貯水池測量を実施しており、また平成 18 年度からは、新たに連携排砂実施期間終了後の 9 月に貯水池測量を実施している。</p> <p>この他、出洪水時、排砂・通砂時の流砂量観測や、黒部川河口より海へと流出した土砂量および土砂の質、海での拡散状況を把握するため、排砂・通砂実施時のヘリによる空撮、海域での採水調査等を実施し、土砂動態の把握精度の向上に努めているところである。</p> <p>また、底質調査については、来年度も継続して調査を行う予定にしている。</p>

【平成19年度連携排砂の実施結果について】

関係団体名	関係団体の意見	対応状況
海面漁業関係団体	<p>② 今後の宇奈月ダムの堆砂形状を踏まえ、漁場環境や漁業へ影響がより少ない排砂方法を検討してほしい。具体的には、昨年引き続き試験通砂を実施し、その検証結果を踏まえ、通砂基準の引き下げによる複数回排砂の検討をお願いしたい。</p> <p>③ 猫又付近の土砂堆積対策については、土砂搬出の具体的方策を検討して欲しい。</p>	<p>② 試験通砂については、通砂基準を引き下げて通砂を実施することにより、翌年の目標排砂量を低減させ、下流河川及び海域への環境負荷を軽減出来ないものかを検討するために、平成18年度から連携排砂計画に組み入れた。</p> <p>平成20年1月24日に開催された第28回黒部川ダム排砂評価委員会においても、今後の留意点として意見が出され、来年度についても引き続き試験通砂を実施し、その効果について検証したいと考えており、その結果を見ながら、ダムの機能維持や排砂による下流河川及び海域の環境への影響の最小化を視野に入れた連携排砂及び連携通砂の方法について、検討して参りたい。</p> <p>③ 出し平ダム貯水池上流の猫又地点にある発電所放水口が出洪水により、土砂で埋まるため、発電機能の維持のため機械掘削を行っている。</p> <p>土砂掘削時においては、土砂を取り除く前に、当該エリアへの流水を遮断するための仮締切りが必要である。従来はこれを周辺の掘削土石により行っていたが、平成19年度は、仮締切り工事において大きな濁りが予想される箇所については、土のうを使用することにより濁りの発生を抑制し、より環境への影響を小さくするよう努めた。今後とも、堆積土砂処理については、環境への影響を小さくするような方法を検討して行きたい。</p>

【平成19年度連携排砂の実施結果について】

関係団体名	関係団体の意見	対応状況
内水面漁業関係団体	<p>① 毎年のように実施される排砂に、よって、魚族の生息環境は悪化する。また、排砂による泥水、流砂、放流した魚、イワナ、ヤマメ、鮎、など、大量の魚が死滅し、水質悪化の恐れがある。排砂による環境悪化は、黒部川ダム排砂評価委員会が、連携排砂の重要性を認識し、関係団体、関係機関の理解を得ながら、排砂を実施して参りたい。一方、黒部川ダム排砂評価委員会には、水産学、環境、地質学、河川工学等、様々な分野の学識経験者より構成し、連携排砂の客観的な評価をい</p>	<p>① 排砂による環境への影響を小さくするたため、土砂の要砂は今後、黒部川ダム排砂評価委員会は、水産学、環境、地質学、河川工学等、様々な分野の学識経験者より構成し、連携排砂の客観的な評価をい</p>

【平成19年度連携排砂の実施結果について】

関係団体名	関係団体の意見	対応状況
内水面漁業関係団体	<p>② 評価委員会は一時的な環境の変化はあるものの、大きな影響はないというが、河川では大量の水生物や魚族が斃死している。黒部川の泥流が清流に戻るのは当然であるが、死んだ水生物や魚は生き返らない。排砂時の現場を踏査もせず、泥水、泥流がどのようなものか知らない委員は言葉を慎むべきである。委員には事前に意見を求められているとのことであったので、この際個々の意見を披瀝されたい。</p>	<p>② これまでも排砂中及び通砂中に、都合がつく委員には、現地にお越しいただき排砂及び通砂の状況を見ていただいているところである。さらに、ビデオ、写真撮影を行い、排砂中及び通砂中に、現地にお越しいただけなかった委員へ説明を行っている。</p> <p>また、排砂中とは別に現地視察会を開催するなど、委員の方々には、現地の状況を見ていただいているところである。</p> <p>排砂は自然現象である出洪水の発生に合わせ行うため、予め決まった日時で実施できるものではなく、委員の予定や都合を勘案すると委員全員が現地に集まることは困難な面があるが、今後とも、できる限り現地踏査をしていただくようお願いしたい。</p> <p>なお、評価委員の方々に対しては、排砂実施及び環境調査の全般にわたって、調査データ等を提示しながら状況説明を行っており、その上で、排砂評価委員会の場において審議・評価がなされているものである。</p>

【平成19年度連携排砂の実施結果について】

関係団体名	関係団体の意見	対応状況
内水面漁業関係団体	<p>③ 「目標排砂量」や「実績排砂量」という言葉は適切ではない。上流からの土砂供給量が大きく、その土砂が流下して河口部に堆積したとしても、排砂後のダム堆砂量の測量値に変動がなければ、実績排砂量がゼロとなる矛盾が生じる。このことを排砂実施機関は、流域住民には、河川事務所ニュースで解説したり、評価委員には、現地踏査を含め理解できるまで説明されたい。</p>	<p>③ 排砂時に流下する土砂は「ダム堆積土砂量の一部」と「出水等に伴う流入土砂量」を合わせたものであるが、排砂とは、前年の連携排砂・通砂以後に出し平ダム貯水池内に貯まった土砂を排出するものであることから、過去より「排砂量」は前者のみを表してきた。          連携排砂実施以降、これまで「排砂量」という表現を用いながら説明をしてきている状況では、表現の変更は、更なる混乱を招く恐れもあり難しいものと考えている。          今後とも、さらにわかりやすい表現にするにはどうすればよいかなどを工夫しながら、用語の意味も含めて、連携排砂に関する住民に対する効果的な広報に努めて参りたい。</p>

【平成19年度連携排砂の実施結果について】

関係団体名	関係団体の意見	対応状況
内水面漁業関係団体	<p>④ 関西電力はダムや発電所、導水トンネル掘削で発生した土砂を、土捨場も造らず谷底に投棄してきたことは紛れもない事実である。上流の仙人谷ダム、小屋平ダムに堆積した土砂のすべてが自然の崩壊によるものではなく、その一部は発電の「見返り品」「副産物」であるということをお忘れはならない。関西電力は、多くの発電所の稼働によって大きな利益をあげてきたのであり、土砂の処置に責任がある。土砂管理協議会は黒部川の総合的な土砂管理を考えるために組織されたと仄聞している。排砂実施機関もダム湖の堆積土砂の有効利用を図るべく検討機関の立ち上げを検討されたい。</p>	<p>④ 現在の排砂方法は、平成7年4月の出し平ダム排砂影響検討委員会での提言を受け、排砂ゲートを用いて、出洪水時に実施している。          今後も環境調査等の結果や関係団体の意見を踏まえ、より良い排砂方法について検討していきたい。          なお、黒部川における総合的な土砂管理は、下新川地域を洪水、土砂災害、高波などの自然災害から守るという意味で重要な意味があり、その中で連携排砂・通砂は主要な役割を担っていることもご理解願いたい。</p>

【平成19年度連携排砂の実施結果について】

関係団体名	関係団体の意見	対応状況
農業関係団体	<p>① 平成19年度は、連携排砂の途中に洪水調節を行ったために、合口用水の取水停止時間が、通常より長引いた。 4月から9月は灌漑期で、農業にとって最も水の必要な期間であるため、取水停止時間の短縮に向けた、一層の努力をしてほしい。</p>	<p>① 排砂・通砂は一定規模以上の出洪水発生時に貯水池内に堆積している土砂及び出洪水に伴い流入する土砂を貯水池内に貯めないうで排出・通過させるものであり、出洪水の末期にあわせて実施している。 今年度においては、自然流下時間を12時間以内として、出・洪水の流況に応じて適切な自然流下時間となるよう対応している。 ちなみに今年度は、自然流下時間を出し平ダムで2時間、宇奈月ダムで3時間として取水停止時間の短縮を図った。 今回の連携排砂は、ダム貯水池の水位低下中に、ダム上流域で降雨が激しくなり、結果として洪水が発生したことから、連携排砂作業を中断して、宇奈月ダムにおいて洪水調節を実施した。 この洪水調節に要した時間は約9時間であったが、治水上、必要なものである。 また、愛本合口堰堤では、出洪水に伴って取水停止となっており、今回、洪水調節のために取水停止時間は長くなったが、排砂作業による影響がすべてではないことをご理解頂きたい。 今後も、取水停止時間の短縮については、引き続き努力して参りたい。</p>

【平成19年度連携排砂の実施結果について】

関係団体名	関係団体の意見	対応状況
農業関係団体	<p>② 連携排砂・通砂については、下流域の天候等を十分に考慮し、その時の状況に合わせて、臨機に対応していただけるよう、関係箇所と協議してほしい。</p> <p>③ 農業関係者の中には、排砂・通砂に対する認識が少ない方々がいることから、排砂・通砂実施時の住民に対する周知を強化してほしい。</p>	<p>② これまでも農業用水の取水停止時間を出るだけ短くするために、平成15年度より排砂実施期間中の6月1日から6月20日の宇奈月ダム運用水位を低めに抑え、一連の排砂作業に係る時間を短縮し、用水の取水停止時間を短縮する対策を講じてきた。 また、平成17年度からは、黒部川沿岸土地改良区連合と調整し、特に長時間の断水が水稻の生育に影響を及ぼすと考えられる7月15日から31日の期間に排砂を実施する場合は、夜間においても河川の濁り状況で取水再開を判断できる様に基準を設け、取水停止時間の短縮を図ること等を実施している。</p> <p>③ これまでも排砂期間前、連携排砂実施中、排砂評価委員会および土砂管理協議会開催時等機会あるごとに新聞折り込みや記者発表、事務所ホームページへの掲載等により広報に努めてきたところである。 また、平成17年度からは、連携排砂実施中に、みら一れテレビ行政チャンネル（入善町、朝日町）上にテロップで愛本合口堰堤の取水状況について広報しており、今年度も、よりわかりやすい表示内容の改善に努めてきたところである。加えて、広報車による地域広報も実施していただいている。 今後とも、連携排砂、通砂や取水停止期間の考え方等についてご理解いただけるよう関係機関等とも相談しながら、より効果的な広報の実施に努めて参りたい。</p>